

烈士を食う

この三字は決して音訳などではない。読んでみるといささか佶屈聱牙としているけれども、しかし字のままであって、つまり烈士を一切れ一切れ食っていくことである。生か煮えているかにお構いなく。

中国人はもともと食人族である。象徴的に言えば人を食う礼教がある。証拠を要する実験派に会えば、歴史の事実を見てもらうとよい。中でも最も際立つのが南宋の時道々人間の干物を食べながら江南の行在所に馳せ参じた山東の忠義の民である。だがこれはただ人を食って義民になったというだけで、食べたのはやはり凡愚の肉であったが、いまでは烈士にお鉢が回ってきて、前代未聞の口福でないとは言えない。

前清の時には暗殺を行なった革命党を捉えて、処刑した後その心臓はほとんど官兵が炒めて分けて食べてしまった。これは現在から見れば大いに烈士を食う気味がある。だがそのころでも普通の逆賊と見なされれば、国粋の皮に寝て肉を食う法が実行され、よって綱常を維持はしたが、決して妖魔が唐僧にしたように、十全大補〔強壮剤〕の特製品だと見なしたのではなかった。現今の烈士を食うようなことは、それが——且つまさにそれが烈士であることを知って食べるのであるから、これは歴来の食い方とは又截然と違うものである。

民国以来久しくなんの烈士も出なかったが、今回五卅——終に北京市民の杞天の憂に依えて、というのは陽曆五月中に二つの四月があるのは、まさしく庚子の予言の“二四が一五に加わる”時になって、ようやく何人かの烈士が上海に現れた。これらの烈士の遺骸は当然全て埋葬された。その目で出棺を見た人がいるのが証拠である。だがまたこれはおそらく全部人に食われてしまったのではないかと、疑う理由を持っている人もいる。この食べ方には二つの方法があるそうだ。一つは貪り食う、一つはちょっと食べる。貪り食うのはまるまる飲み込むのであって、その効能は昇官発財、牛羊繁殖、田地拡張である。こんなでかい福の享受者は一二の武士に過ぎないそうで、飲み込んだのは全体の七、八を占め、余った二人の烈士は大衆の味を知る者に供されて分けて食われた。それらちょっと食べた者は多くて腕か肘、少なければ指一本か爪一つに過ぎず、その利益もまたそれほどではなく、せいぜい五卅紗秋*がいくつか、五卅纏足靴が何足か多く売れるか、あるいは壁に何度か屋号が書かれて、ハエの頭ほどの名利が得られるだけのことだ。ああ、烈士が国に殉じるに、その体になんの思い残すことがあろうか。仮にも国民に利があるなら、挙げて以てこれを贈ることを惜しまないはずである。しからば国民のこの挙は烈士の心を得ている上に、またよく廢物を利用できて、全く非議すべきところはない。しかも潮流に順応して、食べ方を改良したのは、特に喜ばしい。西洋人がかつて中国人は食に凝った国民だと評したことがあるが、至って道理がある。わたしは自ら無能にして、指を染められないのを恥じるが、“烈士を食う”という言葉聞いてとても面白く、故にこの小文を書いて申し述べた次第である。 乙丑の大暑の日。

※初出：1925年8月3日『語絲』第38期

*紗秋 未詳、帽子の類には違いないが、どんなものか。纏足用の靴との対比だから、それなりなものには違いないが。